

アスペルガー症候群を考える - その2 -

前号では、アスペルガー症候群の児童生徒の特徴について、知的発達面は正常範囲であること、自閉症グループではあるがコミュニケーションの障害は軽度であること、社会性が育ちにくいこと等を述べました。

アスペルガー症候群の児童生徒には、周囲が理解し、かかわり方を工夫することが大切です。今回は、具体的なかかわり方について紹介をします。

かかわり方の基本姿勢

否定的な表現や威圧的な態度を避ける

物事の意味や状況を理解することが苦手なため、その場に不適切な行動や言動が見られます。しかし、何がいけないのかわからないので、単に否定するだけでは「受け入れられなかった。」と感じるばかりで、適切な行動変容にはなりません。

本人がどのように理解して行動したかを考える

一見不適切に見える行動にも、本人なりの理解からくるものがあります。本人がどのように感じ、どう考えて行動したのかを理解するところから、指導すべき内容が見えてきます。本人の気持ちを尊重することから信頼関係が生まれ、「心の窓」が開かれます。

本人にとって分かりやすい手段で、簡潔明瞭に伝える

言語獲得が比較的良好であるので、言葉で言えば分かるように思われますがニュアンスや感情などの理解が難しいため、納得できる理解に至らない場合が多いのです。

個人差はありますが、絵や文字など、視覚的な提示を併用することでよく分かるケースもあります。また、情緒豊かに詳しく語るよりも、簡潔明瞭に伝えたいポイントを語るほうが分かりやすいようです。

豊かに育てるために

対人関係面で配慮する

他者の気持ちを読みとって行動する力は獲得しにくく、周囲の同年齢の児童生徒よりは遅れて獲得していきます。そのズレや対人面での未熟さのために、周囲との軋轢や摩

擦が生じやすいのです。この間にいじめや失敗体験が続かないように配慮する必要があります。

言葉の幅広い理解力を付ける

気持ちの読みとりや適切な行動ができるようになるには、行動予定をあらかじめハ－サルしたり、場面理解や言葉の意味を意図的に教えることも大切です。

得意な力を認め、伸ばす

アスペルガー症候群の児童生徒の多くは優れた記憶力、特定分野での優れた知識などが見られます。集団の中でその長所が認められると、自己有能感が育ち、将来的にも専門分野での活躍が期待できます。

学級担任の配慮の下に集団の中での育ちを大切にしつつ、必要に応じて校内体制で支援を検討したり、専門機関を活用するなど、周囲が連携して育てていく視点も大切です。

総合教育センターだより第70号より